

竹富町の海寇民話と遺跡

麻生伸一

1. はじめに

ここでは竹富町に残る海寇民話と遺跡との比較・検証を行い、古琉球期における海寇と対外関係についての考察を深めることを目的とする。ただし、調査方法の不充分さから、地域を波照間島と西表島西部に限定して考察を行う。また、『中山世譜』『球陽』等に登場する人物を取り上げてその関連性も論述したい。

2. 波照間島

波照間島にはいくつかの海寇伝説が存在する。まず、北浜（にしばま）、南浜（ペーばま）には以下のような話がある。

昔、ヤマトかオキナワの軍船が北浜に停泊していて、島の人々は襲われないかと様子をうかがっていた。ある日軍船は島の人々を島の東側に誘導して自分たちは南浜から侵入した。島の人々は勇敢に戦ったが、侵入者は棒の先から火の出る武器を使ってきたので降伏した。

この話は波照間島在住の勝連文雄氏（1916年生）がお話を聞かせてくれたもので、南浜辺りの地名をヤマトフノラー（フノラーとは船を上げる場所だそうだ）と呼ぶとおっしゃっていた。

また、現在の下田原城跡においては、

昔、海賊が下田原城跡に攻めてきた。城にいた兵士たちは日ごろの訓練の成果を発揮して弓矢や石を投げて海賊を撃退した。

という話があるそうだ。下田原城跡あたりには、「大泊」という地名がついているが、その辺りが以前は港であったということを裏づけしているのかもしれない。勝連氏の話によると、下田原城跡は「ブルブツ」とも呼ばれ、港を守る役割がある城だったということである。

また、後述するオヤケアカハチについては、岩崎卓爾の『ひるぎの一葉』（大正9年刊）にはオヤケアカハチの特徴が述べてあって、

「オヤケ、アカハチ」の素性

野生ノ豪侠児不遇ノ「オヤケ、アカハチ」生ル。容貌魁偉、頭髮赤緒、長ク垂レ、齒ハ已ニ成人ノ如ク生イ、眼光人ヲ射殺ス。産婦其ノ怪惡ノ形状ニ驚キ、哺乳養育スルニ忍ビズ、他聞ヲ憚リ裙袴ニ包ミ、夜初更窃カニ海中岩礁ニ捨テテ去ル。生児ハ涛ノ鞞々轟々、壮烈ナル波ノ響、波シブキヲ真額ニ浴ビツツ熟睡セリ。天明ケ海舟、岩礁ニ生児ヲ認メ拾収シテ育テリ。長ジテ筋骨逞シク、鉄ヲ鍛ヘルガ如ク威名隆々タリ。彼レ小島ニ蟄シテ小事ニ●（齒＋屋）●（齒＋足）スルハ、男子ノ屑シトセザル所、聞ナラク石垣島ハ原野広●（水＋門＋舌）、沃土相連リ、

蒔カズシテ生へ、耕サズシテ実リ、無尽ノ宝庫ト称セラル。割居ノ群雄ト角逐シ、一層自己ノ野望ヲ成就スルノ便宜多カルベシト思ヒ單身空拳侵略セリ。島民、彼レノ壮挙ニ、蟻付菌集シ、日数ナラズシテ優勢ナル兵カヲ具備シー島ヲ披●（麻＋非）ス（以下略）

とあり、伝説の域を出ることは無いが、この記述は勝連文雄氏の話とも合致点があつて、この記述からはオヤケアカハチは外国人の子だということになり得る。しかし、時代的には現在よりも少し前のことではあるが、岩崎卓爾がこの口碑を収集したのは石垣島辺りだろうということなので、他の言い伝え同様民話的に捉える必要がある。

他にも波照間島にはゲート・ホーラーという正史には記述されていない人がいて、彼はオランダ人と島の女性との子どもだという。彼は波照間島に漂着したオランダ人と島の女性との子どもであるとか、¹島の女性が反物を貢ぐ時にボツにならないよう、他の反物の出来を確かめるために石垣島まで行く途中新城島でオランダ人に襲われて出来た子どもであるとかいう話がある。²初めの話については、加屋本順幸氏（1968年当時に69才）の話永積安明氏が聞き取り調査を行い、それを東喜望氏が要旨にしたものがあるのでそれをここでは掲載したい。

ゲート・ホーラーは一般に「ホーラー武士」という。波照間では、抜群の剛力を「武士」という。

ホーラー武士は、強力で、島の南端の海ばたの畑に、またたくまに石を積んで暴風壁を造った。また、自分の畑に通ずる道に、石を入れ舗装した。その農道は今も残っている。

台風の際は、島民が港から船をひきあげている間に、穂（稲か）を折り取って両脇に抱えて帰り、俵一俵分もあつた。「南村」の「フナツキ」という家の石垣の隅に「ホーラー武士の石」（高150～160cm。幅80～100cm。）があつた。

オランダ船が漂着して、上陸したオランダ人と、加屋本の女が結婚して生まれたのがホーラー。その子孫は体格が大きく、鼻も高い。目をあけたまま寝る人もいた。ホーラーから私（加屋本順幸氏）まで7代。ただしホーラーの生没は不明。

ホーラーの墓が東を向いているのは、大和の偉い人にだまされたため、東向きにすると子孫に偉い人が出るというからそうしたのだが、子孫には偉人も剛力もない。³

殊に波照間島は英雄が輩出された島であるという。長田大主・オヤケアカハチがそれである。オヤケアカハチには多くの論考が今まで輩出されてきた。彼の起こした「謀反」に

¹ 永積安明「南蛮人ゲート・ホーラー ー波照間島の伝承」『青い海』124号、1983

² この話は、波照間島在住の勝連文雄氏による。

³ 東喜望「八重山の叙事伝承とその背景」『沖縄八重山の研究』法政大学沖縄文化研究所、平成12年

については『中山世譜』は次のように記している。

(弘治)十三年庚申。王発兵、征八重山。先是、宮古島・八重山、自洪武年間以来、毎歳入貢往来不絶。奈八重山酋長、有掘川原赤蜂者。心変謀叛、両三年間絶貢不朝。

時宮古島酋長、有仲宗根豊見屋者。与赤蜂不睦、赤蜂将攻宮古、二島騒動。事聞中山、由是、王命大里等九員、為将。并撥大小戦船四十六以仲宗根為導。本年二月初二日、那覇開船。十三日、前至八重山・石垣之境。

大里等上岸、只見赤蜂。領衆兵、背嶮岨、面大海、布擢陣勢。又令下婦女数十人、各持枝葉、号天呼地、万般呪罵。似行法术。

大里等、驅軍大進。賊兵及婦女、略無畏●、賊陣開処。赤蜂首出●(手+弱)戦。大里大疑曰「賊奴鋭気。不可輕敵」。遂将四十六艘、分為兩隊。一隊攻登野城、一隊攻新河。

赤蜂、首尾不能相応。官軍乘勢、攻撃甚急。賊兵大敗、降者無数。赤蜂被抛伏誅。大里等、別立酋長、撫安百姓。奏凱而帰。嗣後朝貢如例。

これによるとオヤケアカハチは八重山圏に大きな力を持っていて、宮古島までをうかがっていたようである。彼が王府への貢租を絶っていたのは三年間。そのために9人の指揮官を中山王は任命して軍船46艘を仕立てて攻略に繰り出したという。巫女が(おそらく島の司か)数十人で枝葉を手に王府軍を呪詛する中で、王府軍は二手にわかれてついにオヤケアカハチを誅したという。

『球陽』にはより詳しく掲載されていて、このときオヤケアカハチを攻めた王府軍の大將は宮古島の仲宗根豊見親玄雅であったという。

また、オヤケアカハチと長田大主は同時代の人で、『球陽』では

八重山自洪武年間以来、毎歳入貢不敢絶焉。奈、大浜邑遠弥計赤蜂保武川心志驕倣欺老侮幼遂致心变謀叛、両三年間絶貢不朝。此時石垣邑名田大翁主有二弟二妹。一名那礼塘・一名那礼嘉佐成。一妹日真乙姥、一妹日古乙姥。那礼塘・嘉佐成等恆存忠義 不肯従赤蜂、遂為他 被殺害。名田大翁主逃去古見山、隱居洞窟之中。

(以下、王府軍と赤蜂軍の戦鬪の条あるも略す) 即、名田大翁主深蒙●褒嘉、擢古見大首里大屋子。始為頭役也。(以下略)

とあるように、長田大主(ここでは名田大翁主)は二人の妹と弟がいたという。弟たちは(那礼塘・那礼嘉佐成)はオヤケアカハチに殺されて、身の危険を感じた長田大主は西表島古見の洞窟に隠れたとある。王府に忠誠を尽くした長田大主は赤蜂戦争後に古見大首里大屋子という官職に任命されたとある。

ここで二人の歴史上の人物を取り上げたが、注目したいことは真実であれ、虚偽であれ、八重山で大きな力を持った人物が波照間島から輩出されたという認識があることである。この認識がどこから出てきたのかは確認できなかったが、波照間島には八重山を牛耳るような人物が出てきても不思議ではないという認識があったということが興味深い。波照間

島には前述した下田原城跡やほかにもマシユクマヤビラという遺跡が、当時の波照間島の対外関係の深さを物語っているのかもしれない。海寇から襲われるにしても、それに立ち向かう力や襲われるだけの蓄財が無ければそのような事態にはならないであろうと考える。

3. 西表島西部

「蒼む少女の夢死」

この話は、干立におち捨てられた話である。干立村の始祖の裔孫うふうやに生まれ育つ一人娘は、蒼む最中の少女期に夢死した。少女の美しい綺麗な肌身に素直な身質は、四方の人目を引き噂は広く伝わり、世の人特に役人の多くが女に成る日を待ち胸の動悸に浮かれ、彼女の少女らしい瞳に思いを寄せていた。蒼む花肌の少女は、人目を恐れ、人に逢うことを拒み人目を避けていた。

或る日、彼女は海岸を覗いた。突然船乗りらしく丈々しい人々が舟を漕ぎ摺って岸に着く直前でした。娘は是れを見て恐怖にふるえ物凄さに駆け帰って、隠れる雨戸を速早くしめ付ける。その早さと音に驚き見た父母はこれが心配で堪らない。急な事故に考えようもない。父母は娘を箱入れにしたが、是れも父母には安心であり得ないので箱を再び移した。《箱と言えば昔の服入箱である》

父の思いは、安全の場として感づいた塵塚にその箱を埋めた。山隠れに持ち越すにも間がなく、此処なれば安全で無難無事故、安心の場処であり、汚塵の中を目付けたり目的にしたりする何人もいないだろう。叱驚し怖い親には言葉もでない。心の震いをおして親の言うには娘は只今山に薪伐りに登ってどの方の山かも存じません。と、彼の一行は娘がいらないとは真赤な嘘だ娘を人目見せて欲しい瞳を一見だけなのだと言い、若者が腰刀に手をつけ弓を張ったりした。親共をおどし方々を廻り尋ね捜していたが、娘の姿を見得ない彼等は、何かと佇んでいたが、心決めたのか全員が動き初めると、或一人の若者が親をおどかした弓に矢をつがえ、張った矢先を親に向けて何日かは必ず迎えに来る。嘘つきしたら承知しない娘は連れ去る。と、声をはって丹精に力をいれ矢先を親から放して塵塚に向け放した。矢は塵塚を突き吹き散る芥がとんだ。親は土下座の深い礼から面もあげられない。不浄汚悪の場所故、目だたない所と選ぶ親心も他人も、汚塵悪臭の捨て処に事故なしと考える心の感は同一の結合となり、不幸の辻違いは暗い途をたどり哀れを招き、親心も仇に空しく悲しい。娘の蒼む身姿を塵芥に包み殺した悲しさがある。娘の生涯は空し寂しき幻しの霊身となり変ったのである。この悲哀の娘の障害話しが干立村の土に伝承の哀話として潜んでいる。⁴

以上は干立に残る海寇に関する民話である。海寇と判断したのは「船乗りらしく丈々し

⁴ 星勲『西表島のむかし話』ひるぎ社、昭和55年

い人々が舟を漕いでいたこと、腰刀や弓矢などの武器を持っていたことである。しかし、時代が分からないことから古琉球期のことは分からない。ただ、干立からは近世の村跡しか現在のところ残っていないので、近世の話だろう。

他には幾つかの文献等をあたってみたが、海寇の民話は残っていなかった。そこで租納の豪族に関わる伝承と遺跡から海寇についてと対外関係について考察する。

古琉球期に租納で活躍した豪族は、慶来慶田城用緒と大竹租納堂儀佐であろう。大竹租納堂儀佐は『琉球国旧記』に以下のように記述されている。

遠波嵩根所

昔、八重山西表村、有租納堂者。此人、生質剛勇、膂力過人。身長六尺余、嘗干遠波嵩、構家而居焉。一日天氣清明。四顧雲散。独登高山 遥望光景、只見西方。有島如雲。

租納堂見之急催精兵数十人、并發戰船。往臥与那臥。大獲 捷勝一、生一擒酋長二三人、回一至八重山。

後、八重山、納一款中山。時租納堂、細將此事、具一奏中山。

遂以為中山轄下之地矣。自此而來、与那国船舶、往一來八重山時、必繫船于西表島、必到租納堂家。而拜火神焉。

同様の記事は『琉球国由来記』や『遺老説伝』、『八重山嶋由来記』にも掲載されているがどれにも「儀佐」という表現はなく、慶来慶田城の子孫かという論考もある。⁵ただ、前掲の記述では剛力で身の丈も高く与那国を攻めたという。

慶来慶田城の記述は、『慶来慶田城由来記』にある。ただ、1771年に成立したことからこの記述も若干の伝承を元にした記述であるといえる。『慶来慶田城由来記』には慶来慶田城家の始祖の用緒は、はじめ外離島に住んでいたが、土地が狭く不自由なために租納の「ふちこ」に移住した。赤蜂戦争の二・三年前のことで、当時石垣島の横暴を繰り返していた按司を平久保で殺害して、長田大主と盟約を結んだとある。この記述に従えば後に彼は「西表首里大屋子」という官職を賜い、公的な権力者としてのしあがることになる。

租納には上村遺跡という遺跡がある。この遺跡こそが大竹租納堂儀佐・慶来慶田城用緒を育んだ場所である、といわれている。この場所には大竹租納堂儀佐屋敷跡や慶来慶田城屋敷跡がある。上村遺跡からは多くの中国陶磁器等の対外関係の遺品が発掘されている。⁶また、鍛冶屋遺跡も見つかっていて鉄と対外関係の関連性も注目されている。私の考えでは、古琉球期におけるの豪族（公・私問わず）の発展は陶磁器や鉄のような交易品がその権力の源のひとつであっただろうと思う。また、彼等の多くが体格がよく、剛力の持ち主であ

⁵ 池間栄三『与那国の歴史』1972年、自家出版

⁶ 沖縄県文化財調査報告書 第98集『西表島 上村遺跡一重要遺跡確認調査報告一』沖縄県教育委員会、1991
沖縄県文化財調査報告書 第131集『西表島 慶来慶田城遺跡一重要遺跡確認調査報告一』沖縄県教育委員会、1997

るといふことは、対外関係においては武芸や力が重要なのであろう。つまり抗争を踏まえた上での交易であつただろう。